

「……までハツカしてさなざや」

大学4年間占う怖い話

「中 大受かりました」の吉報を受けて、後輩Fと久しぶりに会うことになった。そこで先輩のAとRは彼女の合格お祝いをしてあげるようになったのである。

Fは丸顔が少し痩せたようだったが、春を待ちわびてルンロンと中大ライフを計画中だった。どうやら気になるのは「ハツカレ(彼)」ができるかどうかということらしい。イチョウが校章のT大では、「イチョウの葉が散るまで」、R大では「葛が紅葉するまで」に恋人をつくらなければ、4年間恋人ができないというウワサ……。

「で、中大は、そういうウワサあるんですか?」

とFが聞く。即座にRは言い放った。「6月までよ」。始業式から2カ月間で4年間の命運が決まるなんて「あんまりですよ」と口をとがらすFに、「じゃあ山が紅葉するまでってことにすれば?」とAは助け舟をだした。すると、「ツマラナイ、

他大のパクリじゃないですか」と言うので、「仕方ない、こうなったから先輩がウワサを作ってあげよう。ニヤリと先輩2人は目で合図をした。

「さつきまでは嘘。本当はタヌキを見るまでなんだよ」。Fが固まった。タヌキ? そう狸。ときどき目撃説はあるが、イジワルな先輩も実は見たことはない。「一説にはゴキブリを見るまで、なんてのもあるよ」。

入学式当日だったらどうする? 「真剣に言ってるんですよ、もう」と、Fはフクレ顔だ。中大への愛、あえて都心から離れた広々としたキャンパスに憧れてきたFである。「もっとロマンチックなのはないですか?」と言うので、

「空にオリオン座が傾くまでだよ。冷えた手を誰かのポケットに入れたくなったときよね」とAは珍しく詩的なフレーズを口にした。

まだ見ぬ「ハツカレ」を思って、Fはポツと夢見るヒトミ。その顔を

見ながら、「かわいいわね」とか良かったのだが、「独り身」のAこそ寂しさをひしひしと感じたわけである。「一緒に頑張ろう」と熱く言った。

それまでに、とAは言う。「服を買わずしてウォームピズをしてし

まったこの身体、まずはダイエットしなきゃ」

そしてRも熱くなる。「一緒に頑張ろうね」

合格祝いは互いの激励会になって、遅くまで盛り上がったという話である。(明)

いつもの毛布がふかふか……『ハルカ・エイテイ』私的な断想

たまには、本の話。どうにも書かずにはおれない本に久々に出会ってしまった。

姫野カオルコ著『ハルカ・エイテイ』(文藝春秋)です。題名もさることながら、装丁も小花模様がかわいらしい、春の到来が待ち遠しく感じられるような一冊である。

現在「エイテイ」のハルカが、そのいたって平凡な人生を振り返るという筋書き。お見合いで結婚した大介さんをはじめとする家族との関わりを中心に描かれている。

この本を読むと、いつものご飯がおいしく感じ、いつもの毛布がふかふかに感じ、いつもより少し

だけ人に優しくなれる、ついでに大好きな人にめっちゃくちゃわがままを言っ、そのあとめっちゃくちゃ尽くしたくなるんです。というカードをはっつけて店頭で売ったらどうかしら? なんちゃって。

小説全体が、幸せなことばかりというわけでもないのだけれど、全体に流れる空気が安定している。描写が精緻だから、読者に絵をはっきりと連想させ、平凡なストーリーなのにページをめくらせる力がある。

とっておきの1場面はといわれれば、ハルカの浮気相手(金目当てで付き合っていたことが発覚)の婚約者に怒鳴り込まれ、大介に浮気がばれてしまうというシーン。大介はし



ばらく黙ったあと、いきなり柱に頭を打ち付けて（!!）背を向けたまま、ハルカにこう言う。

「……貞淑でいられへんくらいきれいな女にしか男は言い寄ったりせん。（中略）ハルカは美人や。そら男はほつとかへん、こんな美人」

この言葉を聞いて、ハルカは死ぬほど後悔する。が、また、浮気をする（笑）。しかし、今度はもつとスマートに、あくまで大介との関係のスパイスに、である。

わが「読書史」。大学に入ってから、やれ時間がないだの貸し出し期限のある図書館はメンドーだのと理由をつけて本から逃げ回っていた。本が嫌いになったのではない。本を読んで楽しいと思えない自分が嫌でたまらなかった。それは、昨日まで通学路と一緒に登下校していた友だちにふいに、そつぽを向かれるよう

銀座で待ち合わせ

銀座で待ち合わせ。銀座なんてめったに足を踏み入れない。少し緊張しながら

な寂しきがあった。信じていたのは感性だけだったのに、長じるにつれ自分のそれが大して他人とは変わらないうことを自覚してしまう。普通であることを受け入れることはわたしにとつてとても難しいことだった。無知という名の自己陶酔は、たまらなく居心地がいいのだから。

だけど、時々ふと思うのだが、人は誰かと生きていこうと決めたとき、どこかで「普通に生きていくこと」を了解する。誰かと生きていくということは、きょうという当たり前の一日を確かに積み重ねていくことに他ならないのだから。そう思って、カレに『ハルカ——』の話をあんなりしつこくしていたら、「もういい」とアキラられてしまったのだけれど。

（能）

ジュースに口を付け、なかなか来ないA子を待つ。「ごめんごめん!! 残業で」。待

ち合わせ時間を10分過ぎて現れたA子はOL!? スーツを着て、化粧も派手な感じで。リクルート

スーツを着た「就活」中の学生が多く見られるこの時期だが、A子がそに見えないのは彼女の脱いだ白いロングコートのせいだろうか。

A子はこの春、大学のキャリアセンターで募集していたインターンシップに応募した。一定期間企業の中で研修生として働き、就業体験する制度だ。彼女が選んだのは銀座のど真ん中の大企業! 「大人」に囲まれ、事務作業、調査、ミーティング参加などをするといい。

「いろいろ勉強になることばかり。入社1年目の女性に私についてくれているんだけど、1年目なんて思えない! 失敗しても前向きに励む姿勢や責任感がかつこよくてさ」

しかし彼女もそんな「大人」と過ごすことで、成長できたようだ。「社内では敬語だからね、礼儀作法が身に付いたカナ。名刺の受け渡しとか、頂戴いたします」って。初めて使う日本語ばかりだけど「私を相手にも姿勢をピンと伸ばし、

手も前で揃えちゃってる。「最近ね、私も社内の人から、ホンモノのOLみたいになってきたね」って言われるようになったの! 銀座で道を聞かれることもあるのよ。私この街のOLに見えたのかな? って、嬉しくなるんだ」

確かに全体的に前とは違う、落ち着いた雰囲気漂っている。このまま社会人の彼氏もGETできそう!? 「でもね」。A子は急に切ない表情をした。「社員さんに飲みに行こうって誘われたんだけど……ためだったの。私未成年だった。大学から怒られちゃうからやめとこうね」って。どれだけ背伸びしても、現実はずもなんだよねえ」

大人になりたくても、私たちはまだまだ大学1年生、19才だ（この春新2年）。A子がさつきから飲んでるのも……「マックシェイク」。銀座に来てまで100円マックをする私たちがホントの「大人」になれるのは、まだまだ先ね。

（直）

悩めるしのXマスイブ 娘の気持ち、母のシンパイ

05 年12・24、クリスマスイブ
を目前に友人Lが頭を抱えていた。彼氏なし3年以上のLに

「春」がきたのは9月。本来なら、彼と初めて過ごすクリスマスに胸を躍らせているはずなのに……。

Lは実家暮らしで、毎年、家族でクリスマスを祝う習わし。でも、今年の彼女は23日は友人の家にお泊り、そして24日は彼とのデート、25日は毎年恒例のコンサート、と夢のプランになっていた。「今年は家族でクリスマスは過ごせない」と母親に告げると母親は「なぜ、どうして？」と不満に問いただし、あげく口論となってしまったらしい。

「私も、せっかくのクリスマスを家族と険悪なまま終わらせたくないしね」と、Lは悩んでいたのである。そこで、彼氏を家に招待するという名案(?)を思いついたのだった。しかし、彼女は今まで一度たりとも両親に恋人を紹介したことはなく、彼氏の存在さえも伝えていない。24

日の予定も親には「友人と遊ぶ」ということにしていたのだ。果たして何と切り出せばいいものか。23日の夜、友人宅でLは「どうすればいい？」と相談を持ちかけた。すると、「とりあえず親に彼氏の存在を伝えなよ」というのが友人のアドバイス。「うーん」と悩んではみたものの、もう24日まで時間がない。Lは勇を鼓して親に電話をかけた。まず、口論の自分の非を謝り、様子を伺いながら

よいよ本題へ。
L「今年のクリスマス、うちで祝えないじゃん」
母「それは、あんたが譲らないからじゃないけど、もういいわよ」
またしても母親が不機嫌になっている。だが、ここが勝負どころだ。

「それで考えたんだけど、その友だちをうちに呼ぶっていうのはどう？」



「友だちだって(母娘の関係が)険悪な雰囲気だったらかわいそうでしょう？」

「うん。けど、それは謝るから!」
しばらく押し問答を続けていると、「友だちって誰なのよ?」と、母が言った。
「っていうか、友だちではないんだけど……」

「友だちじゃなきゃ何なのよ?」
「えっと……彼氏」。Lは、何を言われるかと、ついケータイを強く握り締めた。
「何でそんな他人呼ばなきゃいけないのよ!」

……他人? 彼氏は他人ではないだろうと思ひ、Lは勇敢にも反論した。
「別に他人ではないじゃん!」

「あんた、友だちの彼氏なんて他人でしょうが!」。……Lは緊張の糸が切れ、思わず吹き出してしまった。

「お母さん、友だちの彼氏じゃなくて……私

の彼氏だよ(笑)」
「……何よ、それ?」。絶句する、母の顔が目につかぶようだったらしい。

結局、24日は家族+彼氏でぶじに食卓を囲んだそうだ。

「それから親と彼氏の話するの?」と聞いてみると、Lは報告した。「お母さんたらこう言うのよ。こないだ連れてきた彼氏だか何だかしらないけど、あの子は付き合う分には良いけど、あんたの結婚相手には向いてないわよ、だって」

すぐに結婚がどうのじゃないのにネ、と笑うLの表情に、ほんのり春の風。

(夏)

